

私の子供の頃 (When I was a child)

加納 大路

Kano, Daiji

(82-372 (B): Advanced Japanese II)

私は今十八歳で、カーネギメロン大学に通っている。ついこの間、春休みに実家に帰省していたとき、食卓の隣の戸棚の上の私の写真が目にとまった。自分が五歳の頃のものだ。思えばあの頃はどうしようもない問題児だった。常にわがままで、何か気に食わないことがあると暴れたり泣いたりしていた。写真を見つめているうちに色々な記憶が蘇ってきた。中でも印象的なのは、私が幼稚園の年長だった頃のある日、自分が二階の屋外へと通じるドアを蹴り破ってしまった時の事だ。

そのドアは前から少しサビていてうまく開かなかったので、子供は先生に開けてもらうか、校舎の反対側のドアを使うように言われていたのだが、自分はさっさと外に行きたかったので、無理やりそのドアを一人で開けることにした。何をとち狂ったのか、助走をつけ、飛び蹴りを放ちつつドアノブを回せば開くだろうと考えた当時の私は、約 1.5 秒で練った計画を実行し、ドアを壊してしまったのである。当然、何事かと駆けつけた保健の先生に叱られた。

その日のトラブルはそれだけではなかった。保健室で、ドアを蹴り破った際に負った傷口を治療してもらった後、自分の教室に戻ると、まだお遊戯の時間が終わってなかったので、教室は空っぽだった。何気なく教室をぶらぶらしていると、先生の机の上に、昨日のおやつのスィートポテトがいくつか置いてあることに気づいた。実はそのスィートポテト達は、昨日お休みだったクラスメートのお腹に入る予定の物であって、誰も取ってはいけないと、担任の小河先生から言われていたのだが、私は平然とそれを食べてしまった。さらに、食べているところを小河先生に発見されてしまった。

「叱られる！」とその時思ったが、先生はなんと泣き出してしまった。

「だいちゃん、先生、あれだけ食べちゃ駄目って言ったよね？いつも言っているじゃない！自分が何か悪いことをしそうな時、心でストップしなきゃって。。。」

正直に言って、その時酷く心が痛んだ。いつも笑っている小河先生が泣くを見るのは初めてだったし、何故かその時の自分は罪悪感でいっぱいだった。その後のことはあまり覚えていない。ドアを蹴り破ったこともあり、その日は幼稚園に親を呼び出され、夜までこっ酷く叱られているはずなのだが、先生を泣かせてしまったことがあまりにもショックだったらしい。

それからというもの、私は少しは周りのことを配慮し、自覚を持ち始めた。

心でストップ—今でもはっきりと覚えている小河先生の言葉だ。後先を考えずに、本能の赴くまま生きていた私を正してくれた先生に今でも感謝している。